

规范日本语 下

山西教育出版社

走はんにほんゴ
规范日本語

王二贵 编译 孙凤翔 赵景阳 注释
黄玉雄 乔庭荣 词汇

Ⓣ

山西教育出版社

〔晋〕新登字3号

责任编辑 任兆文

封面设计 李松年

规范日本语

(下册)

王二贵 编译 孙凤翔 赵景阳 注释

*

山西教育出版社出版 (太原并州北路11号)

山西省新华书店发行 太原印刷厂印刷

*

开本: 850×1168 1/32 印张: 22.125 字数: 625千字

1993年1月第1版 1993年1月山西第1次印刷

印数: 1—12.000册

ISBN 7—5440—0218—7

G.219 定价: 平装12.00元
精装15.50元

编译者序言

本书是《规范日本语》上册的续编。上册是会话本，下册是精读本。这套书是应邀专门为业大、夜大、电大、特别是短期轮训后出国的留学生和出国进修人员编译的。一般只需一年多的时间，通过学习这套书，不仅可以顺利地通过出国考试，而且还可以达到日语大专水平。本书的突出优点是：

一、课文选材得当，语言标准、规范、地道。本书是从日本近五百万字的高中课本中精选出来的二十篇优秀文章。如小说、诗歌、戏剧、论文、叙述文、随笔、游记、杂记和书信等等。小说和随笔等又分为现代和古代两种。可以说囊括了日文中所有的各种不同体例的文章，而且又大都是名家的名篇。因此说，通过学习本书不仅能够学到标准的地道现代日语；还能够学习到一些日语的文言文基础知识；懂得和学会用日文破读汉文等等。

二、汉语译文在翻译时力求准确、贴切、通顺。便于读者特别是自学日语的读者，把日语原文与汉语译文对照起来学习，加深对日语原文的理解。

三、本书的语法注释系分课编成。每课包括：1、释题；2、作者介绍；3、人物及事项注释；4、词汇注释；5、词法注释；6、句法注释，共六部分。繁简不等，而以词法和句法为重点。使读者不仅理解语言，而且具备必要的知识，以理解课文的内容；又通过对课文内容的理解，加深对语言的理解。

注释的范围一般限于本课出现的语言而在本书中又未作过注释的。未必系统，但求详尽。又鉴于本书读者通过学习《规范日本语》上册有了一定的基础语法知识，所以在条目选择上着眼于

语言探索、功能分析和词义解说，必要时对近义词和近似功能进行类比，以及语感、余韵的玩味。藉以洞察机微，循序引深，眼力不难直透纸背。例句尽可能从本文中引用，使语法知识直接为语言服务。

在最后几课中，对文言文法和汉文破读法，作了较为系统的注释，但都限于入门阶段，把初学文言文和汉文破读的读者作为对象。这样作为好，既可避免为追求阳春白雪而分散了精力，影响了学习现代日语，又可学习一些文言文法和汉文破读法的基础知识。

四、编译了日常生活常用的基本词汇。本书出现新词四千多个，常用汉字又都注有假名读音，这样学习起来就方便多了。再者，新出现的单词，从第一次出现后，一般都要在以后的各课中不断出现。这样就有利于读者对词汇的理解和记忆。为了便于读者学习和运用，本书所出现的词语，在每课新出的单词表里，除标有声调、阐明词性、词义外，还特意把每个单词的读音和日文汉字分开两项写在前面。这对学习新出词语的读音和辨别词义都有好处。

五、图解课文、图解句型，生动有趣。为了便于读者理解课文，我们还将此书的二十篇课文全部都配上了生动有趣的插图。插图概括了课文内容，为读者提供了直观学习的具体形象。而且将插图配置在了每一课的课首，读者在学习课文之前，通过观看插图，即可大致了解课文的内容和中心议题。

再者，为了便于读者特别是自学日语的读者剖析句型，透彻理解复句、难句，特殊句型的句法结构，每课的语法部分还增设了图解句型。这是本书的又一特点。

编译者

一九八九年九月十二日夜于太原

目 次

1	明治以後の日本語(明治以后的日语)……………	松村 明	2
2	ありがとう(谢谢)……………	柳田国男	23
3	語言と創造性(语言和创造性)……………	熊沢 龍	40
4	文のはたらき(句子的功能)……………	熊沢 龍	60
5	文章を書く心(写文章的心境)……………	中島健蔵	79
6	手紙の文章(书信文)……………	河盛好蔵	108
7	本と人生(书与人生)……………	大岡 信	136
8	詩について(谈谈诗)……………	村野四郎	161
9	小説について(谈谈小说)……………	川副国基	185
10	知魚楽(知鱼乐)……………	湯川秀樹	203
11	北の森から(漫游北国林海)……………	辻邦 生	219
12	屋根の上のサワン(屋脊上的萨旺)……………	井伏鱒二	240
13	津軽(津轻)……………	太宰 治	270
14	転落の詩集(墮落诗集)……………	石川達三	319
15	ジュリアス=シザ(裘力斯・凯撒)……………	福田恒存訳	446
16	説得について(说服)……………	林巨 樹	489
17	自然と人生(自然与人生)……………	徳富蘆花	503
18	ひとり言(自语)……………	幸田露伴	516
19	舞姫(舞姬)……………	森 鷗 外	529
20	山月記(山月记)……………	中 島 敦	595
	附录: 词汇总表……………		622



1 明治以後の日本語

松村 明

日本語の変遷を振り返ってみるとき、明治維新を一つの転機として、それ以前とそれ以後とにおいては、かなり大きな変化が見られる。もちろん、人間の生活は、ずっと連続して営まれているのであるから、言葉の上でも、一応は連続して行われているのである。したがって、明治維新を境として、それ以前とそれ以後とで、特にはっきり一線を画するような断層が、言葉の上に見られるというようなことはない。言葉の変化は、徐々に、また漸層的に進展していくのが一般であり、幕末から明治初年にかけての言葉の推移も、その点では例外ではない。

明治初年以來今日まで、およそ百年余を経過してきている。この間の言葉の推移を見ると、ある部面では、あまり大きな変化は見られないが、別の部面では、かなり大きな変化を遂げているものがある。例えば、音韻などは、既に明治初年において大体のところは今日と大差のないものになっているのであるから、明治初年以來今日までに、そう大きな差異は見られないのである。語法などになると、音韻に比べればかなりの変化があるとも言えるが、全体として、基本的な体系は、明治初年において、やはり大体今日と大差のないものになっているのであるから、その変化も、語法体系の全体に関わるものというよりは個々の部分的な事実に関するものが多いということが言える。ところが語彙の部面になると、これは、また、かなり大きな変化を来していると言うことができる。そして、その変化も、明治年間、特にその前半に

おいて著^{いちじる}しいものが見られるのである。これは、明治になるとともに、世は文明開化^{かいか}の時代になって、欧米からの新しい思想や文物をどんどん自由に取り入れることになり、それによって、新しい事態に対応する新しい語彙が必要となったためである。その他、文字の面でも、特にその用い方などの点^{てん}でかなりの変化が見られるが、これも、語彙^{ごい}の面での変化^{ひんか}に比較すれば、それほどのこともないと言えるであろう。

明治以後の日本語において、このように、語彙の面での変化が大きいというのは、結局、日本人の生活態度なり生活^{けいざい}形態^{けいざい}なりが、明治以後、特に大きく変わったことに基づくと言うことができる。このことは、また、待遇^{たいぐ}関係の言い方などに、いろいろな変化をもたらすことにもなっている。江戸時代においては、士農工商の身分関係による区別が嚴重に保たれていたのに対して、明治以後はそのような階級制度^{くわい}が崩れて、一応^{しんぴやうどう}四民平等の世となったのである。このようなことは、当然待遇^{たいぐ}関係の言い方に差異をもたらすことは、容易に考え得ることであろう。待遇^{たいぐ}関係のうち、尊敬語や謙讓語の言い方が簡素化され単純化されるとともに、丁寧語については、その言い方が発達してきている。これはやはり、明治以後の日本語の特色の一つとして考えられるのである。

さて、明治以後の日本語について考えると、なお、別の面からの特色と見られる点が幾つか見られる。まず第一に考えられるのは共通語の確立ということである。その共通語は、東京語を基盤として成り立っている。このことは、国語史の上の事実としては、非常に大きな変化であると見られる。明治以前において、長く標準的な言語としての位置^{いちし}を占めていたのは京都語であり、それは、上方語系の言語であった。このことは、平安時代以来、明治になる以前まで、大体において、そのまま続いていたものと見られる。もっとも、江戸時代の半ば^{なか}以後は、しだいに、江戸語が独自

の体系を持つ言語として形成されるようになってくる。それとともに、江戸語も、京都語と並んで、全国に通ずる言語としての資格を得てくることになる。この江戸語は、東国語の地盤ちばんの上に形成されたものであるから、上方語系の京都語とは、全く言語圏いんを異にするものである。このようにして、江戸時代の後半においては、上方語系かみかたの京都語と東国語系の江戸語とが二つの対立する言語として、それぞれ、全国に通用する言語としての資格を持つことになったのである。しかし、明治になるまでは、一応、標準とすべき言語を一つ求めるとすれば、それは、やはり長い伝統の上に立つ京都語ということになるのである。ところが、明治の新政府によって、江戸が東京と改称されてここに首都が移されることになり、東京が政治・文化の中心地となるとともに、全国に通用すべき共通語の地位は、京都語から東京語へと移ることになる。それ以来、現代日本語は、東京語を基盤とする共通語を中心として発展してきて、今日に至るわけである。こうして、明治以後の日本語としては、東京語を基盤とする共通語の普及・発達ならということが大きな問題として考えられてくる。このことは、奈良時代における大和地方つもとの言語、平安時代以降ごにおける京都語など、主として上方語系の言語をもとにして考えられる日本語の歴史にとっては、全く新たな事実になるわけである。明治以後の日本語の特色を考えると、この点を逸することはできない。

さて、このような、東京語を基盤とする共通語は、明治以後今日まで、極めて広くゆきわたることになった。名前だけでなく、共通語としての実を得てくることになる。もちろん、各地方には、それぞれの方言がなお行われており、また、地域ちいきによっては、同一地域においても、階層の違いによって、異なった体系の言語が行われている。しかし、そうした地域による言語差いさう、位相による言語差を越えて、広く各地域・各階層に共通する言語としての共通語の普及度は、明治以後今日まで、極めて高いものとな

ってきている。明治以後の日本語の特色を考えると、更に、このような、共通語の普及・浸透しんとうということも見逃みのがすことができない。これは、一つには、義務教育としての学校教育が普及したことによるのであり、また、新聞・ラジオその他のマスコミの発達ということもこれを助長している要因として考えられるが、これらの点は、明治以前には見られないところである。

もう一つ、明治以後の日本語において大きな特色と考えられるのは、言文一致げんぶんいっち、すなわち話し言葉への書き言葉の接近ということである。平安時代以降いこう、仮名の発生・普及とともに、書き言葉と話し言葉とは、それぞれに独自の発達を遂げ、大体において別個の言語体系として行われてきた。それが明治以後、特に明治二十年前後から、主として小説家の手によって、言文一致の運動が進められ、実践された。この言文一致の運動の進展とともに、話し言葉に基づく書き言葉として、口語文が発達・普及するようになった。口語文には、いろいろのスタイルのものがあつた。それは、決して話し言葉そのままのものではないが、とにかく、それ以前の書き言葉に比較すれば、ずっと話し言葉に近づいたものになってきている。この点は、先の共通語の普及ということと無関係ではなく、むしろ、口語文の発達が共通語の普及を助長している面も見られるのである。とにかく、このように言文が二途の方向をとらず、言文一致の方向に向いていることは、また、明治以後の日本語の特色の一つとして見られるのである。

さて、これらの点とともに、明治以後の日本語を考えると、忘れることのできないのは、西欧語の影響ということである。日本語は古くから、外国語としての中国語からの影響を大きく受け、漢字を取り入れ、漢語を日本語の語彙の中に豊富に入れていたが、西欧語からの影響はずっと受けることがなかつた。室町時代末になって、西欧人の渡来があつたが、ホルトガル語などから外来語として取り入れることがあつたのが、西欧語からの直接の影響の

最初である。その後も、オランダ語からの語彙を取り入れたたりもしているが、それらは、いずれも語彙を取り入れたただけであり、しかも、その語数もそれほど多くはなかった。ところが、江戸時代の末期になると、西洋からの文物を取り入れることになって、西欧語も外来語として多数入ってくるようになった。特に、明治以後は、外来語として西欧語からの語彙を多数取り入れただけでなく、西欧語からの翻訳もどんどん行われるようになり、訳語としての新語を多く作ることもあった。特に、その場合の訳語には、漢語を用いることが多く、西欧語としての語形をそのまま取り入れた外来語のほかに、訳語としての漢語が非常に豊富になった。先に、明治以後の日本語としては、語彙の面で特に著しい変化が見られると言ったが、それは、このような西欧語からの外来語や訳語としての漢語が豊富に取り入れられたことも大きな理由になっているのである。そのほか、西欧語からの影響は、単に語彙の面だけでなく、語法や音韻・文字・表記法その他の面についても考えられる。とにかく、このように、語彙や語法・音韻・文字・表記法その他の面で、西欧語からの影響を強く受けているが、ある意味では、明治以後の日本語は、西欧語からの影響を強く受けたことによって、独自の発展を見せ、その特色を特に著しく示すことになったとも言えるのである。先に記した言文一致運動の進展についても、その運動そのものが、根底において、西欧語の文章のことを考えて起こってきたものであり、そういう意味では、それ自身、西欧語からの影響によるものと言うことができるのである。しかも、言文一致の実際の文章を見ると、そこには、西欧語の文章からの影響を強く受けている面もあるわけである。

以上のように、明治以後の日本語について見てきたのであるが、更にいろいろの面から見ていくこともできる。また、これを、いろいろの面から見ていくことによって、その特色は、ますます、多角的にこれをとらえることができるわけであろう。

1 明治以后的日语

松村明

当回顾日语变迁的时候，可以看到以明治维新为一个转折点，其前后发生了相当大的变化。当然，人类的生活是一直连续进行的，因此在语言上也大体是连续发展的。所以，以明治维新为界，在其前后特别清晰地画一条线，这样的断层，在语言上似乎是见不到的。语言的变化是缓慢的，渐进的。从德川幕府末期到明治维新初年的语言变迁，在这点上也不例外。

从明治初年以来到现在，大约经过了百余年，观察这期间的语言变迁，在某些方面看不到多大的变化，而另外的方面，却变化显著。例如音韵等，明治初年大体上已与现在的差别不大了，所以，明治初年以来至今，看不到多么大的差异。而语法等，虽说比音韵变化很大，但从整体来说，基本体系在明治初年大体就已经与今日无大的差别了，纵有变化，也是涉及到个别部分内容的多于涉及整个语法体系的。然而，谈到词汇方面，可以说发生了巨大的变化。而且这种变化，又是在明治年间，特别是在其前半期，更为显著。这是因为随着明治的到来，社会进入了文明开化时代，从欧美大量而自由地吸取新的思想和文化。这样，与新世态对应的新词汇就成为必要的了。此外，在文字方面也能够看到很大的变化，特别是在文字用法等方面。但这与词汇方面的变化比较，可以说还不是那么显著的。

明治以后，日语在词汇方面发生如此大的变化，可以说归根到底是由于日本人的生活态度或生活方式，在明治以后发生了特别大的变化的缘故。这又给语言待遇的表达等方面带来了种种变化。江

户时代严格保持着士、农、工、商身份关系的区别，而与此相反，明治以后那种阶级制度崩溃了，基本上成了四民平等的社会。这种变化，在语言待遇的表达上带来差异，当然是可以想见的。在语言待遇中，尊敬语、谦让语的说法简单化、单纯化了。同时，礼貌语的说法发达起来。这也可以认为是明治以后日语的特色之一。

当考虑明治以后的日语时，另外还可以从别的方面发现几个特色。首先能考虑到的就是共通语的确立。共通语是以东京语为基础而形成的。这点作为国语史上的一个事实，可以说是一个重大的变化。明治以前，长期占据标准语位置的是京都语，即上方语系的语言。这一点自平安时代起直至明治以前，大体上一直是那样延续下来的。当然，江户时代中期以后，江户语逐渐形成为自成体系的语言。同时，江户语也与京都语并驾齐驱，获得了通行全国的资格。因为江户语是在东部语的基础上形成的，所以与上方语系的京都语属于完全不同的言语圈。也就是说，江户中期以后，上方语系的京都语和东部语系的江户语这两种对立的语言，各自分别获得了全国通用语言的资格。但是，在明治以前，如果要求一种标准语。那仍然是建立在悠久传统基础上的京都语。然而，随着明治新政府把江户改称东京并迁都过来，东京成为政治、文化的中心之后，可以通用于全国的共通语的地位，就由京都语转向了东京语。此后，以东京语为基础的共通语成为现代日语的中心而发展至今。这样，作为明治以后的日语，以东京语为基础的共通语的普及和发展，就成为一个重要问题。这对于奈良时代的大和地方语、平安时代以后的京都语等主要以上方语系的语言为基础来考虑的日语的历史来说，无疑是崭新的事实。在考虑明治以后日语特色的时候，不能够脱离这一历史事实。

这种以东京语为基础的共通语，从明治以后直到今天得到了极大的普及。不仅有共通语其名，而且得到共通语之实。当然，各地还使用着各自的方言，而且有的地方在同一地域之内，由于阶层的不同，而使用着不同体系的语言。但是，超越这种由地域和由地位

造成的语言差别，作为广泛通行于各地区、各阶层语言的共通语的普及程度，明治以后至今已经发展到极高水平。在考虑明治以后日语特色的时候，更不能放过这样的共通语普及、浸透的事实。考虑其主要原因，一是由于作为义务教育的学校教育的普及，再就是报纸、广播以及其它传播媒介的发达也起到了促进作用，这些方面在明治以前是没有的。

明治以后日语的另一个大特点是言文一致，即书面语向口语靠拢。平安时代以后，随着假名的产生和普及，书面语与口语各自独立发展起来，总体上发展成两种不同的语言体系。这在明治以后，特别是从明治二十年前后开始，主要经小说家之手，言文一致运动得到推进和实践。随着言文一致运动的进展，作为以口语为基础的书面语，白话文得到了发展、普及。白话文有种种形式，而决不等于照搬口语，但总的来说，同以前的书面语比较，与口语接近得多了。这一点与先行的共通语的普及不无关系。甚至可以说白话文的发达也是促进共通语普及的一个方面。总之，言文不向两条路上去而朝着言文一致的方向发展，这也可以看作是明治以后日语的特色之一。

与此同时，在考虑明治以后日语时，不能忘记的是西欧语的影响。从古时候起，日语就受到作为外国语的中国语的极大影响。引进汉字，丰富地将汉语充实到日语词汇中，而一直未受到西欧语的影响。到了室町时代末期，西欧人远涉重洋而来，于是把葡萄牙语作为外来语吸收进来，这便是最初受到西欧语的直接影响。其后也从荷兰语等吸收了词汇，但那些都只限于词汇吸取，且数量并不太多。可是到了江户时代末期，引进西欧文明，西欧语作为外来语也大量涌入。特别在明治以后，不仅大量从西欧语吸收大量外来语词汇，而且在大量翻译西欧语的过程中，又创造了许多新的翻译词汇。特别是当时的翻译词汇中，使用很多汉语词汇，除了原封搬过来的西欧语词形之外，作为译语的汉语词汇也极大地丰富起来。前面说过明治以后的日语，在词汇方面可以看到特别显著的变化。其

很大的理由就是这样丰富地吸收了从西欧语引进的外来语和作为翻译词汇的汉语。此外，从西欧语受到的影响，不仅仅在词汇方面，而且还可以从语法、音韵、文字、表记法及其它方面考虑。总之，在语汇、语法、音韵、文字、表记法及其它方面，来自西欧语的影响是很强的，在某种意义上可以说，明治以后的日语由于受到西欧语的强烈影响，而显示了独自的发展，并特别显著地表示出其特色。前述言文一致运动的进展，归根到底也是思索了西欧语的文章之后而兴起的，在这种意义上，可以说其本身就是受西欧语影响的产物。而看一下言文一致的实际文章，自然也可以发现受西欧语文章强烈影响的一面。

上面就明治以后的日语进行了一番回顾，当然还可以从各个方面去观察，而且通过从各个方面对其观察，其特色会更加全面地领会。

新 出 单 词

へんせん	〔変遷〕	①(名・ス自)变迁
ふりかえる	〔振り返る〕	③(五・自)回头看, 回顾(过去)
いとなむ	〔営む〕	③(五・他)做, 办, 经营
いちおう	〔一応〕	①(副)一次, 一下, 首先, 大体
さかい	〔境〕	②(名)界线, 分界
じょじょに	〔徐徐に〕	①(副)徐徐, 渐渐
ぶめん	〔部面〕	①(名)方面
すいい	〔推移〕	①(名ス自)推移, 变迁
いちじるしい	〔著しい〕	⑤(形)显著的
おうべい	〔欧米〕	①(名)欧美
ぶんぶつ	〔文物〕	①(名)文物
どんだん		①(副)顺顺当当, 接连不断
もとづく	〔基づく〕	③(五自)根据, 基于, 由于
いっする	〔逸する〕	①③(ス他)失去, 脱离, 逸出
きわめて	〔極めて〕	②(副)极, 非常
ゆきわたる	〔行渡る〕	④(五自)普及
いそう	〔位相〕	①(名)(不同地域, 性格, 职业, 阶级所惯用的)语言的差别
ちいき	〔地域〕	①(名)地域, 地区
しんとう	〔浸透〕	①(名・ス自)渗透
マスコミ		①(名)大众传播, 大规模宣传
とげる	〔遂げる〕	②(下一他)达到, 完成, 实现
スタイル		②(名)文体, 样式, 形态, 姿势
にと	〔二途〕	①(名)两条道路
ポルトガル語	〔ポ〕	(名)葡萄牙语
らい	〔渡来〕	①(名・ス自)(由外国)输入进来,